

表現方法としての名詞修飾節

—日本語教育の中で—

大塚容子

Noun-Modifying Clause as a Means of Expression

Yoko Otsuka

Abstract

Relative clause construction has been generally studied in terms of the syntactic structure, and only a few researches on the function of noun-modifying clauses have been made. This paper deals with the usage of noun-modifying clauses in discourse.

Otsuka (1997) classified the noun-modifying clauses into three types in terms of “given information” and “new information,” and showed that each type has its own function in discourse. In this paper, however, it is shown that “background” could be the basic function of noun-modifying clauses in discourse.

Key words: noun-modifying clause, discourse, background

Received Sept. 29, 1997

1. はじめに

中・上級の日本語学習者が書いた作文を読んでいると、文法的な文が並んでいるにもかかわらず日本語としてどこか不自然に感じる文に出くわすことがある。以下(1)は英語母語話者が書いた文である。(例文の下線は筆者による。)

- (1)さて、やはり、クリスマスは子供たちにとって、とても特別な祭日です。もちろん、クリスマスの本当の意味はキリストの誕生を祝うことですが、だんだんサンタクロースの意味も入ってきました。十二月に入るといろいろなことが起こります。一つはサンタの妖精たちは子供たちのふるまいを調査しに来ます。その妖精たちはサンタのお手伝いですから、子供たちがよければサンタに伝えます。逆に、子供たちが悪ければ、そのことも知らせてしまいます。(1)

下線の従属節で表わされている内容はこの作文の中で理由として取り立てる必然性があまり感じられない。子供たちのふるまいを調査した妖精たちが調査結果をサンタに報告するのは

当然のことだと理解されるからだろう。この従属節の内容をサンタを修飾する形で表わすと、不自然さが解消されるようである。

(1)' …サンタのお手伝いである、その妖精たちは、子供たちがよければサンタに伝えます。…

(1)と(1)' の下線部は表現内容は同じだが、表現方法が違うということである。

この問題を日本語教育の立場から捉えると、名詞修飾節の「非用」⁽²⁾ということになる。もちろん従属節（理由節）の誤用という捉え方もあるが、(1)の下線部を含む複文はこの一文をみているかぎり文法的な誤りはないのだから、従属節の誤用だけでこの不自然さは解決できないであろう。

なぜ学習者は(1)' のような形で名詞修飾節を用いることができないのであろうか。外国語習得において母語からの干渉があり、この非用は母語（英語）の影響によるものだと仮定すると、英語と日本語では談話⁽³⁾における名詞修飾節の現われに違いがあることが予想される。そこで、本稿では談話における日本語の名詞修飾節の機能について考察する。まず、日本語で書かれた講演原稿とその英語訳を比較することによって日本語と英語における名詞修飾節の現われを調査する。次に、英語を母語とする日本語学習者の作文に現われた名詞修飾節を検討する。これらを踏まえて日本語の名詞修飾節の語用論的機能について考える。（以下、名詞修飾節という言葉は、区別する必要のない限り、関係節、あるいは連体節と同義として用いる。そして、名詞修飾節によって修飾される名詞句を主名詞、名詞修飾節と主名詞全体を修飾節名詞句と呼ぶ。）

2. 名詞修飾節の現われ

談話における日本語の名詞修飾節の現われ、およびその機能を探るために、日本語で書かれた講演原稿とその英語訳を比較し、日本語における名詞修飾節が英語でどのように訳出されているかを調査する。

調査の詳細に入る前に、用語の定義をしておく。

2.1. 述定と装定

上記の(1)と(1)' の違いは佐久間（1941）の述定と装定の違いとして捉えることができる。述定とは簡単に言えば主部－述部の関係を備えたもの（(2)）のことで、装定とは修飾－被修飾の関係で一つのまとまりを有しているもの（(3)）のことである。

(2)a. この本はおもしろい。

b. 子供たちが公園で遊んでいる。

(3)a. おもしろい本

b. 公園で遊んでいる子供たち

2.2. 名詞修飾節

2.2.1.分類

益岡・田窪 (1992) は名詞修飾節を修飾節と主名詞との修飾関係によって「補足語修飾節」, 「相対名詞修飾節」, 「内容節」の3種類に分類している。補足語修飾節とは、主名詞が修飾節中の述語の補足語となっているものである。「そば」, 「後」といった、相対関係を表わす名詞が主名詞になっており、主名詞が修飾節内で直接的な文法役割を担っていないものが相対名詞修飾節、修飾節が主名詞の対象の内容を表わしているのが内容節である。ここでは英語との対応関係を調べる関係上、英語の関係節と同一の構造をもつと考えられる、補足語修飾節のみを扱う。(以下、日本語の名詞修飾節は補足語修飾節を指すものとする。)

2.2.2.名詞修飾節と主名詞との位置関係

日本語と英語の最も大きな構造上の違いは主要部の位置である。日本語は主要部が修飾要素の後ろに来る主要部後行型言語であり、一方英語は主要部が修飾要素に先行する主要部先行型言語である。これは主名詞と名詞修飾節との位置関係にも反映されている。

(4) a. 昨日私が読んだ本

b. ノーベル文学賞を受賞した大江健三郎氏

(5) a. the book which I read yesterday

b. Kenzaburo Oe, who was awarded a Nobel Prize for Literature

ただし、英語で形容詞が名詞を修飾する場合には修飾要素である形容詞が名詞に先行する場合がある。

(6) a. an interesting book

b. beautiful flowers

しかし、形容詞による修飾のすべてが主名詞に先行するわけではない。形容詞の後ろに別の構造が置かれると主名詞に後行する (リーチ (1996))。

(7) a. The chairman asked the people present (at the meeting) to express their views. (同, p. 22)

b. The boys involved (in the fight) were sent away to another school. (同, p. 22)

リーチは(6)を「前位修飾語」、(7)を「後位修飾語」と呼んでいる (同, p.365)。

主要部先行型の英語において(6)は marked (有標) だと言える。形容詞の修飾の問題に関連して日本語の名詞修飾節について考慮すべきことがある。それは日本語の名詞修飾節内の「タ形」が形容詞的に用いられることがある (金水 (1994)) という点である。形容詞的用法の名詞修飾節は英語で前位修飾語の形容詞として訳される可能性があるため、形容詞的用法の名詞修飾節は調査対象に含めないことにする。この条件により日本語では修飾要素は必ず主名詞に先行し、英語では必ず主名詞に後行するということになる。

2.2.3.用法

名詞修飾節には制限的用法と非制限的用法があると言われている。制限的用法とは名詞修飾節が主名詞によって表わされる集合を限定する働きをするものであり、非制限的用法とは

限定するのではなく、主名詞に対する情報を付加する働きをするものである。英語では主名詞と関係詞との間にコンマが存在するか否かという形式によって両者の違いが明らかになると一般に言われている（長原（1990））。日本語には英語のような形式上の違いはないが、用法の違いは存在する。しかし、この用法の違いは修飾節と主名詞との関係によって生まれるものである。本稿の目的は談話における表現方法としての名詞修飾節の機能を探ることにあるので、必要のない限り、このような用法の区別はしない⁽⁴⁾。

2.3.調査

2.3.1.対象

調査対象としたのは大江健三郎氏の「あいまいな日本の私」（以下、「あいまい」と略記）とその英語訳“Japan, the Ambiguous, and Myself”（山内久明訳，以下「Ambiguous」と略記）である。日本語の原文に現れた名詞修飾節が英語でどのように訳されているかを調査する。日本語の名詞修飾節が語順の違いを除いて一対一の関係で英語に訳されるわけではない。英語で名詞を修飾する手段は関係詞を使った構造だけではない。しかし、ここで大切なのは表現方法，すなわち述定の表現か装定の表現かということである。従って，日本語と英語との対応関係を判定する時，述定か装定かをその判定基準とすることにする。そして，本稿では後位修飾語である，下記の英語の構造を準名詞修飾節として扱うことにする。

(8)準名詞修飾節（英語）

a. 形容詞句

例：the people present at the meeting (= (7 a))

b. 前置詞句

例：a letter from my son Philip（リーチ（1996），p.521）

c. -ing分詞節

例：the train arriving at Platform 3（同，p. 455）

d. 過去分詞節

例：a man known as “The Grey Wolf”（同，p.455）

e. to不定詞節

例：something to sit on（同，p. 287）

f. 同格

例：Charles Bell, a teacher（同，p.62）

2.3.2.結果

調査対象となる名詞修飾節は形容詞的用法ではない補足語修飾節である。「あいまい」の中に現われた，この条件を満たす名詞修飾節の異なり例数は88である⁽⁵⁾。そのうち，非制限用法は29例である。

2.3.2.1.概観

表現方法としての名詞修飾節

結果は以下の通りである。

(9)英語訳に用いられた構造

構造 \ 用法	制限	非制限
名詞修飾節 ⁽⁶⁾	22	8
準名詞修飾節	15	9
その他	12	7
訳出されず	10	5

(n=88)

本多(1982)が指摘するように、大江健三郎氏の文章は修飾・非修飾関係が離れ過ぎていてわかりにくいのが、名詞修飾節そのものの多用が目立つ。(9)より、準名詞修飾節を含めると、日本語の名詞修飾節の61%が英語でも名詞修飾節を使って訳されていることになる。用法別では制限用法では62%、非制限用法では59%が名詞修飾節・準名詞修飾節で訳されている。

以下、順に各々の例を示す。

2.3.2.2.英語でも名詞修飾節が用いられている場合

- (10) a. 川端が、おそらく意識して選んだあいまいさは、その講演のタイトルがあらかじめ示していました。 (「あいまい」, p.4)
- b. The kind of vagueness that Kawabata deliberately adopted is implied even in the title of his lecture, ... (「Ambiguous」, p.111)
- (11) a. さて、正直に言えば、私は二十六年前にこの場所に立った同国人に対してより、七十一年前にほぼ私と同年で賞を受けたアイルランドの詩人ウィリアム・バトラー・イェーツに、魂の親近を感じています。 (「あいまい」, p.6)
- b. To tell the truth, however, instead of my compatriot who stood here twenty-six years ago, I feel more spiritual affinity with the Irish poet William Butler Yeats, who was awarded a Nobel Prize for Literature seventy-one years ago when he was about the same age as me. (「Ambiguous」, p.114)

2.3.2.3.英語で準名詞修飾節が用いられている場合

- (12) a. このような現在を生き、このような過去にきざまれた辛い過去を持つ人間として、私は川端と声をあわせて「美しい日本の私」ということはできません。 (「あいまい」, p.7)
- b. As someone living in present-day Japan and sharing bitter memories of the past, I cannot join Kawabata in saying “Japan, the Beautiful, and Myself.” (「Ambiguous」, p.116)

—ing 分詞関係節を用いた例である。

- (13) a. また広島，長崎の，人類がこうむった最初の核攻撃の死者たち，放射能障害を背負う生存者と二世たちが—それは日本人にとどまらず，朝鮮語を母国語とする多くの人びとを含んでいます—われわれのモラルを問いかけているのでもありました。

(「あいまい」, p. 9)

- b. Those moral props mattered also in regard to the victims of the nuclear weapons that were used for the first time in Hiroshima and Nagasaki, and for the survivors and their offspring affected by radioactivity (including tens of thousands of those whose mother tongue is Korean).

(「Ambiguous」, p. 119)

ここでは過去分詞関係節が用いられている。(14)は to 不定詞節と同格が使われている。

- (14) a. 日本語の作家として，初めてこの場所に立った川端康成は，『美しい日本の私』という講演をしました。

(「あいまい」, p. 4)

- b. Yasunari Kawabata, the first Japanese writer to stand on this platform as a Nobel laureate for literature, delivered a lecture entitled “Japan, the Beautiful, and Myself.”

(「Ambiguous」, p.110)

2.3.2.4. 名詞修飾節が使われていない場合

原文の名詞修飾節が独立文で訳されているのが9例，従属節が6例，名詞句が1例ある。この他に前置の形容詞の例が2例ある。(15)と(16)が独立文の例，(17)と(18)が従属節の例である。

- (15) a. それは不幸なさきの大戦のさなかでしたが，ここからはるかに遠い日本列島の，四国という島の森のなかですごした少年期に，私が心底魅惑された二冊の書物がありました。

(「あいまい」, p. 1)

- b. During the last catastrophic World War I was a little boy and lived in a remote, wooded valley on Shikoku Island in the Japanese archipelago, thousands of miles away from here. At that time there were two books that I was really fascinated by:...

(「Ambiguous」, p. 107)

- (16) a. かつて韓国の秀れた詩人の政治的自由をもとめる，ハンストに参加した私は，いま，天安門事件以後，表現の自由を失っている，きわめて良質な中国の小説家たちの運命を憂えています。

(「あいまい」, pp. 14-5)

- b. I once took part in a hunger strike for the political freedom of a gifted Korean poet. I am now deeply worried about the fate of those talented Chinese novelists who have been deprived of their freedom since the Tiananmen Square incident.

(「Ambiguous」, pp. 125-6)

- (17) a. 家庭を持った私に生まれた最初の子供は—かれに私は light という意味の，光という名をつけました—知的な発達に障害を担っていました。(「あいまい」, p. 3)

- b. After I got married, the first child born to us was mentally handicapped. We named him

Hikari, meaning “light” in Japanese. (「Ambiguous」, p. 109)

(18) a. 民主主義の原理を越えた、さらに高いところに絶対的な価値をおく、旧憲法を支えた市民感情は、半世紀に及ぼうとしている民主主義の憲法のもとで、単に懐かしまれるよりもさらにリアルに、生き続けています。 (「あいまい」, p. 10)

b. The prewar Japanese constitution, which posited an absolute power transcending the principle of democracy, was sustained by a degree of support from the general public. Even though our new constitution is already half a century old, there is still a popular feeling of support for the old one, which lives on in some substantial than mere nostalgia.

(「Ambiguous」, p. 120)

従属節を用いた (17b), (18b) では、事実関係がより明確に表現されている。

(19) a. 人間のつくる音楽へとかれを仲立ちしたのは、なによりまず鳥の歌だったのでした。 (「あいまい」, p. 4)

b. Birds were the things that occasioned and mediated his composition of human music.

(「Ambiguous」, p.110)

(20) a. ところがさらにかれが作曲を進めるうち、父親の私は、光の音楽に、泣き叫ぶ暗い魂の声を聞きとるほかなくなつたのです。 (「あいまい」, p.16)

b. As Hikari went on to produce more works, I began to hear in his music also “the voice of a crying and dark soul.”

(「Ambiguous」, p.127)

名詞句が使われている (19b) は「彼が人間の音楽をつくること」という意味になっている。(20) は「暗い」という形容詞があるため、英語では前位修飾語となっている。

2.3.2.5. 訳出されていない場合

日本語の意味内容が訳出されていない例は大きく2種類に分類することができる。一つは日本語と英語の表現構造の違いによると考えられるものである。Hinds (1986) によれば、状況中心言語 (situation-focus language) である日本語では、人間中心言語 (person-focus language) の英語に比べて存在表現が多く用いられる。次に示すような「～する人がいる／多い／少ない」といった日本語の表現をそのまま英語に訳すことは少ないようである。

(21) a. このように個人的に語ることは、いま私の立っている場所と時にふさわしいものでないと感じられる方はすくなくないでしょう。 (「あいまい」, pp. 2-3)

b. Speaking in this personal vein might seem perhaps inappropriate to this place and to this occasion.

(「Ambiguous」, p. 109)

(22) a. 自分の作品を、虚無と批評する者がいるが、西洋流のニヒリズムという言葉はあたらない、心の根本がちがうと思う、… (「あいまい」, p. 6)

b. My works have been described as works of emptiness, but it is not to be taken for the nihilism of the West. The spiritual foundation would seem to be quite different.

(「Ambiguous」, p. 113)

もう一つは表現構造の違いとは考えられない場合である。

(23) a. あらためて個人的な話になりますが、知的な障害を担って生きる私の息子は、鳥の歌からバッハやモーツァルトの音楽に向けて育ってゆき、ついには自分の曲を作るようになりました。(「あいまい」, p. 16)

b. If you will allow me to mention him again, my son Hikari was awakened by the voices of birds to the music of Bach and Mozart, eventually composing his own works.

(「Ambiguous」, p.127)

この例では名詞修飾節の部分は訳されていないが、その代わりに息子の名前が付け加えられている。

(24) a. さらに光の作品は、わが国で同じ時代を生きる聴き手たちを癒し、恢復させもする音楽として、広く受けとめられることになりました。(「あいまい」, p. 17)

b. His music, moreover, has been widely accepted as one that cures and restores other listeners as well. (「Ambiguous」, p. 128)

名詞修飾節の部分は「other」になっている。これらの名詞修飾節によって表わされている内容は、特に必要な情報ではない。息子が障害を担っていることはすでに述べられているし、光の作品を聞くことができるのはこの時代を生きている人間であるのは自明のことである。

3. 英語母語話者の名詞修飾節の使用

ここで視点を変えて、英語を母語とする日本語学習者が談話の中でどのように名詞修飾節を用いているかをみる。次に示すのは準上級日本語学習者⁽⁷⁾が書いた作文⁽⁸⁾の中に現われた名詞修飾節である。

(25) a. 自己紹介をすると、テキサス州の地図を見せて私の住んでいる町について説明してあげようと思います。

b. 飾りではない使っている地図の中で、日本語で書いてある名古屋の地図が一番好きです。

c. 写真を見る時、プロが撮った写真の中で、人間の写真が一番好きです。

d. 英語を使いたくてうずうずしている日本人が多いので、よく全然知らない人に「Where are you from?」と聞かれます。

e. ……しかし日本人は私の顔を見ると英語で話さなければならないような感じがあります。それを好みませんが日本語が話せる外国人が少ないるのでこの場合には私は日本人の考え方がわかるかもしれません。

f. 二年間ぐらい前に、私は老人ホームでアルバイトをしていました。入院していた人々は大変病気で、大変年を取ったから、死ぬ場合が多かったです。

- g. だれも入りたくない家は英語で HAUNTED HOUSE と言います。HAUNTED という言葉は何か幽霊が現れるという意味です。そのごろ夜になるとすぐに一晩じゅう私は泣きはじめました。かわいそうに母は毎晩私を静めさせました。がまんできなかつた母はそういう家に行かせました。

これらの名詞修飾節は書き手の意図する対象物を限定する上で必要不可欠な要素だと言える。また、語彙力の不足を補う一つ的手段として名詞修飾節が使われている場合もある。

次に名詞修飾節の非用の例を示す。

- (26) a. 私の一番好きな写真はフランシスコという従兄弟に撮ってもらいました。
b. (写真の人物を説明する作文)
... そして、三年前に兄の奥さんは初めて赤ちゃんを産みました。いつまでもその時を忘れることができません。兄弟は三人で病院へ行って兄と一緒にアシュルに会いに行きました。本当にすばらしい感じがしました。アシュルは写真の左側で座っている子です。それから姉はミネアポリスに住んでいるのでブレイクが生まれた時、学校を休んで病院へ行ってブレイクに初めて会いました。姉も私も泣いたほどうれしかったです。
c. 一番好きな一枚を選ぶことが難しいですけど、私の一番好きな写真は母が撮った家の犬の写真かもしれません。「スヌーピー」という犬を十年間ぐらい飼っています。世界の犬の中で、私の犬は一番かわいくて、しあわせだと思います。犬の写真を見る時、ほほえましい感じがして、家のことを思い出します。母はしろうとですけど、二十年ぐらい前に、写真を現像しました。今も写真を撮ることが上手なので、とてもいい犬の写真を撮りました。

(26a) は比較的よく見られる非用の例である。(26b), (26c) は下線部分を名詞修飾の形にすると自然な日本語になるのではないと思われる。

(26)' a. 私の一番好きな写真はフランシスコという従兄弟に撮ってもらったものです。

(26)' b. それからブレイクが生まれた時、ミネアポリスに住んでいる姉は学校を休んで病院へ行ってブレイクに会いました。

(26b) の理由節は「学校を休んで」にかかると考えられるが、ミネアポリスに住んでいることが学校を休むことの直接の理由とは解釈しにくい。ここで言いたいことは学校を休んでまでブレイクに会いに来たということである。学校を休んだ直接の理由は早くブレイクに会いたかったからだと考えるほうが自然であろう。これは1. で紹介した(1)と同様の非用である。

(26)' c. 二十年ぐらい前に初めて写真を現像した母は、素人ですが今も写真を撮ることが上手なので、とてもいい犬の写真を撮りました。⁽⁹⁾

ここで言いたいことは「母はしろうとだが写真を撮ることが上手だ」ということであろう。「二十年ぐらい前に写真を現像した」ことは写真に対する興味の程度を示すものであり、写

真を撮ることが上手なことの付加的情報に過ぎない。

4. ここまでのまとめ

日本語で書かれた講演原稿とその英語訳を比較することによって、談話における名詞修飾節に関して次のことがわかった。

- ①日本語の名詞修飾節は独立文や従属節の形に訳されることがあり、従属節として訳されると事実関係がより明確になる。
- ②すでに談話に登場している情報や、文脈から理解できる情報をもつ名詞修飾節は英語では訳されないことがある。

また、日本語学習者の作文の調査により、次のことがわかった。

- ①名詞修飾節は書き手の意図する対象物を明確にする方法としてよく用いられている。
- ②独立文や従属節で表現されている内容を名詞修飾節にすると自然な日本語になる場合がある。

5. 考 察

外国語習得の上で母語からの干渉があると仮定すると、前節で述べた②と③は一つの事柄を別の角度から眺めたものだと言える。つまり、日本語の名詞修飾節は英語とは違った語用論的機能があるということである。

まず英語で従属節の形に訳されている場合について考える。この点に関して益岡 (1995 a) の興味深い観察がある。益岡は非制限用法の名詞修飾の機能は情報付加であるとした上で、その機能をさらに二つに分類している。一つは主名詞に対する情報付加、もう一つは主節の事態に対する情報付加である。前者は主名詞を談話に登場させる時に主名詞に関する予備的情報を提供する。ここで注目したいのは後者である。主節の事態に対する情報付加の内容として「対比・逆接」, 「継起」, 「原因・理由」, 「付帯状況」を挙げている。以下に各々の例を示す。

- (27) a. 新興の地本問屋に押され、屋台骨の傾きかけていた鶴屋仙鶴堂が, この一作で息をふきかえしたと言われているのも無理はなかった。 (『男の八分』, p.53)
- b. おまきに案内されてきた秀三郎は, 部屋への出入りを拒んでいるような机の大きさと、ちらかっている反古紙に驚いたようすだったが,... (『恋知らず』, p.143)
- c. クロは動物が人間と話を交せることを彼にはじめて教えてくれた最初の犬だった。いや、話を交すだけでなく、哀しみを理解してくれる同伴者であることもわからせてくれた。それができるのは、今の時代にはメルヘンという方法しかないことを知った沼田は, 大学時代から童話を書くことを生涯の職業として選んだ。 (『深い河』, p.119)

- d. 板の間に坐っていた男は, 香奈江の視線の位置を正確にとらえ, 口元だけで笑った。
(「男の八分」, p.57)

(27a) は「屋台骨が傾きかけていたけれどもこの一作で息をふきかえした」と言い換えることができる。(27b) は「案内されてきて驚いた」という連続する動作を表わしているし, (27c) は「メルヘンという方法しかないことを知った」ことが「大学時代から童話を書くことを生涯の職業として選んだ」ことの原因になっている。(27d) では名詞修飾節が, 男が視線をとらえ, 口元だけで笑った時の状況を表わしている。

前述の(17)の名詞修飾節は「継起」, (18)は「逆接」を表わしていると考えられる。しかしここで注意したいのは名詞修飾節そのものに「継起」, 「逆接」といった内容を表わす機能があるわけではないし, このような関係が明示的に表わされているわけではないということである。これらは名詞修飾節の内容と主節が表わす事態との関係によって付随的に生まれる解釈である。逆に, 名詞修飾節が「継起」, 「逆接」を表わすとすれば, 「テ形」や逆接の接続助詞を用いた表現との違いが問題となってくる。

では日本語で名詞修飾節そのものが談話の中で果たす役割は何なのであろうか。英語で名詞修飾節が用いられなかった19例の原文のうち12例において, 修飾節名詞句が述語から遠い位置, 逆に言えば文頭, あるいは文頭に近い位置にある。12例中5例が主題である⁽¹⁰⁾。述語の直前にあるものは3例である。

- (28) a. それは不幸なさきの大戦のさなかでしたが, ここからはるかに遠い日本列島の, 四国という島の森のなかですごした少年期に, 私が心底魅惑された二冊の書物がありました。(= (15a)) (「あいまい」, p.1)
- b. 前者には, 世界を恐怖が襲うようだった時代に, 私が谷間の小さな家で夜をすごすより, 森に登り樹木に囲まれて眠ることに安息を見いだす子供であったことの, 自己正当化の根拠があると感じられました。(「あいまい」, p.1)
- c. 六歳の夏をすごしにでかけた山小屋で, 木立の向こうの湖からクイナの番いの声が聞こえた時, 野鳥の歌を録音したレコードの解説者のアクセントで, 一クイナ, です, といったのが, 息子が人間の言葉を話した最初でした。(「あいまい」, p.3)
- d. 開国以後, 百二十年の近代化に続く現在の日本は, 根本的に, あいまいさの二極に引き裂かれている, と私は観察しています。(「あいまい」, p.8)
- e. かつて韓国の秀れた詩人の政治的自由をもとめる, ハンストに参加した私は, いま, 天安門事件以後, 表現の自由を失っている, きわめて良質な中国の小説家たちの運命を憂えています。(= (16a)) (「あいまい」, p.14)

(28a) と (28b) の修飾節名詞句は二格の時間表現, (28c) はテ格の場所表現, (28d) と (28e) は主題になっている。

益岡 (1995b) は格助詞を伴う時間表現と格助詞を伴わない時間表現を比較し, 前者は事

態の起こった時を特定するが、後者は「事態の叙述に必要な前提的（予備的）情報を提示する」（p.154）とし、「状況成分」と呼んでいる。そして格助詞を伴う表現（格成分）もある条件の下では状況成分になり得ることを示している。「ハ」で取り立てられる、主題の前に置く、事態を叙述する部分から切り離す、これら三つのいずれの方法でも状況成分化することができる。そして状況成分は事態を叙述する、主張の焦点にはなれないと述べている。

- (29) a. 開会式が10月1日に行われた。
 b. 10月1日には開会式が行われた。
 c. 10月1日に、開会式が行われた。
 d. 10月1日、開会式が行われた。
 e. 爆発事件は10月1日に起きた。
 f. 10月1日に爆発事件は起きた。

(29a) には「開会式が行われたのは10月1日である」という解釈が可能であるが、(29b)、(29c) にはこの解釈はない。(29d) のように助詞を伴わない表現にするとこの傾向は一層はつきりする。(29e) で重要な情報は10月1日であるが、(29f) では事件が起きたことが重要である。

この状況成分化は場所表現にも起こるようである。

- (30) a. 開会式がナゴヤドームで盛大に行われた。
 b. ナゴヤドームでは開会式が盛大に行われた。
 c. ナゴヤドームで、開会式が盛大に行われた。
 d. *ナゴヤドーム、開会式が盛大に行われた。
 e. 私はナゴヤドームで歌った。
 f. ナゴヤドームで私は歌った。

(30b)、(30c) は「開会式が盛大に行われたのはナゴヤドームでだ」という解釈ができない。時間表現と違って場所表現の場合は(30d) のような格助詞を伴わない表現は不適格となる。

これらの点を踏まえて(28a)～(28c) を見てみると、修飾節名詞句が文中で状況成分の機能をもっていることがわかる。これらの修飾節名詞句を主張の焦点として解釈することができないからである。

- (28) a. *私が心底魅惑された二冊の書物があったのは、ここからはるかに遠い日本列島の四国という島の森のなかですごした少年期だ。
 b. *私が谷間の小さな家で夜をすごすより、森に登り樹木に囲まれて眠ることに安息を見いだす子供であったのは、世界を恐怖が襲うようだった時代だ。
 c. *木立の向こうの湖からクイナの番いの声が聞こえたのは、六歳の夏をすごしにでかけた山小屋でだ。

(28d)、(28e) のような主題成分は当然主張の焦点になれない。

(28) d.*根本的に、あいまいさの二極に引き裂かれているのは、開国以後、百二十年の近代化に続く現在の日本だ。

e.*天安門事件以後、表現の自由を失っている、きわめて良質な中国の小説家たちの運命を憂えているのは、かつて韓国の秀れた詩人の政治的自由をもとめる、ハンストに参加した私だ。

このような状況成分や主題成分は談話の上では「伝えたい内容を理解する際の枠組」(マッカーシー (1995), p.72) として機能すると考えられる。そして枠組は述定の表現よりも一つのまとまりをもつ装定の表現のほうが設定しやすい。

英語で名詞修飾節、あるいは準名詞修飾節が用いられている37例の中で、修飾節名詞句が主題になっているものは9例あるが、状況成分になっているものは1例も見られない。日本語には状況成分に名詞修飾節が付加されているものがある。

- (31) a. 相手の女性が他の人と結婚式をあげる日, 彼はとても東京にいる気になれなくて、満員の東海道線に乗って京都にきたのだった。 (『父親』, p.15)
- b. だが, 節分を過ぎたばかりのその夜更け, そんな静寂のなかに, 突然女の悲鳴が響き渡った。 (『足洗い屋敷』, p.183)
- c. 東京へ来た昭和二十三年頃, 小田急の玉川学園前という駅を利用する場所に住んでいた。 (『三越前』, p.71)
- d. 朝の早い大野屋では, 夜中の眠りは深く, しわぶきの音ひとつ聞こえない。 (『足洗い屋敷』, p.183)
- e. 申し訳程度の広さしかない座敷のなかで, 小平次はやけに堂々として見えた。 (『消えずの行灯』, p.219)
- f. 老人の歯のようにまばらに立てられている杭に, 濡れた芦の葉がびっしょりとからみついている。 (『置いてけ堀』, p.86)

(31a) ~ (31c) は時間表現, (31d) ~ (31f) は場所表現である。

では、「枠組」として機能する修飾節名詞句の名詞修飾節はどのような働きをしているのであろうか。前述したように状況成分は叙述の前提的情報を提示するのであるから、状況成分化した修飾節名詞句の名詞修飾節は談話の中で「背景」となる情報を提供していると考えられる。Hopper & Thompson (1980) は背景 (background) を次のように述べている⁽¹¹⁾。

(32)..., in any speaking situation, some parts of what is said are more relevant than others. That part of discourse which does not immediately and crucially contribute to speaker's goal, but which merely assists, amplifies, or comments on it, is referred to as BACKGROUND. By contrast the material which supplies the main points of the discourse is known as FOREGROUND. (p.280)

(28)の表現を述定の表現にすると、名詞修飾節で表わされていた内容が談話の中で大きな位置を占めて提示される。

- (33) a. それは不幸なさきの大戦のさなかでしたが、ここからはるかに遠い日本列島の四国という島の森のなかで少年期をすごしました。その時、私が心底魅惑された二冊の書物がありました。
- b. 六歳の夏をすごしに山小屋にでかけました。そこで木立の向こうの湖からクイナの番いの声が聞こえた時、...

(28a) で重要なのは二冊の書物があったことで、この後、二冊の書物について説明されることが容易に予測されるが、(33a) では少年期のことについて語られるような印象を受ける。(33b) も同様で、山小屋に出かけたことが大きな事件の引き金になったような印象を受ける。このように名詞修飾節は、わざわざ独立文を使って述べる必要はないが、談話展開上必要な情報を背景として提示しているのである。

主題は談話の中で「これから述べることについて」という枠組を設定するのだから、状況成分と同様に捉えることができるだろう。(27b) ~ (27d) の主題に付加された名詞修飾節は、「継起」、「原因・理由」、「付帯状況」という意味を表わしているかもしれないが、それらの意味内容を明示する文法的手段はない。文脈から各々の解釈が生まれるだけである。談話における名詞修飾節の機能は関係を明示するのではなく、背景として提示することにあるのではないかと思われる。日本語の主題成分内の名詞修飾節が英語では訳されない場合があったが、日本語の名詞修飾節が背景として機能すると考えれば納得がいくであろう。(23)において息子が知的な障害を担っていることはすでに述べられているので特に必要な情報ではない。だが、そのことを改めて確認することによって息子が自分の曲を作ることになったことが談話の終結として意味をもつのである。しかし、その確認のし方は決して大げさなものであってはならない。背景として提示するのである。このような時に登場するのが名詞修飾節なのである。

では、なぜ日本語の名詞修飾節が背景としての機能を果たしやすいのであろうか。それは日本語が主要部後行型の言語であることと関係があるように思われる。主要部後行型の言語である日本語では、補部が主要部より先に現われる。例えば、「太郎が花子を殴った」というような動詞文においても、太郎と花子という人物が先に登場して、その二人の登場人物が何をしたかは一番最後に述べられる。英語では逆に太郎が何をしたかが先に述べられ、その後、相手に登場する。これを映像の撮り方に喩えると、まず中心人物となる被写体をロングショット⁽¹²⁾で撮り、それから被写体を大写しにしていくというのが日本語である。ロングショットの時には当然被写体の回りの風景、つまり、背景も同時に撮られるわけである。名詞修飾節は大写しにする前のロングショットに当たる。全体像をただ写すだけである。その全体像の中の背景をどのように解釈するかは後に続くシーン(文脈)次第なのである。一方、主要部先行型の英語はこの逆である。まず中心人物の大写しが写り、それからロングショットになる。先にクローズアップされた被写体が写し出されるのであるから、そこに映し出さ

れた映像の意味が理解できないと思われる時には必要な情報を前もって提示しておかなければならない。名詞修飾節が主名詞に後行する英語では、名詞修飾節が予備情報を提供するの
は難しいであろう。

6. 終わりに

大塚（1997）は情報の質という観点から名詞修飾節を情報提供型、情報付加型、情報統括型の3種類に分類し、各々の名詞修飾節の現われと談話展開との関係を検討した。情報提供型は背景と共に主名詞を談話に登場させる、情報付加型は談話に既に登場した情報を背景として提示し、さらに談話を展開する、情報統括型は既知情報を背景として提示し、結論を述べると考えると、談話における名詞修飾節の基本的機能は背景化に集約できるのではないかと考えられる。

最後に日本語教育の問題に戻りたい。作文の添削は、添削のし方が担当者によって随分異なっていたり、学習者の意図をどこまでくみ取ることができるか等、様々な問題をもっている。学習者の日本語能力が向上すればするほど誤りの所在がつかみにくくなり、添削は難しくなる。初めに示した(1)の作文で、なぜ名詞修飾節を使うと不自然さが消えるのかを学習者に説明するのは極めて難しい。何を背景とするかは認識のし方と密接な関係があるし、背景をどのように表現するかは言語によって異なるからである。しかし、日本語の名詞修飾節が「限定」とか「情報付加」といった機能とは異なる働きを談話の中で担っているということは、読解の授業を通じて十分学習者に伝えられることなのではないかと思われる。

注

- (1) 文法的な誤りは一部訂正してある。
- (2) この用語は水谷（1985, pp.13-4）の造語である。
- (3) 談話とは、南・田中（1983）に従い、話しことば、書きことばを含め、「いくつかの文（一つの文だけでもかまわない）が常識的に見た場合なんらかのひとまとまりの言語表現となっているもの」（p.1）と定義しておく。
- (4) 大島（1995）は制限用法であれ、非制限用法であれ、「連体修飾節の基本的機能は主名詞の表わす事物ないし、事物のもつ属性について“属性”を加えることである」（p.115）と述べている。
- (5) 本文では名詞修飾節が用いられていないが英語訳で名詞修飾節が用いられている場合がある。これらは今回の調査対象に含めない。
- (6) 関係詞が省略されている場合もある。
- (7) ここでいう準上級日本語学習者とは、南山大学留学生別科準上級クラスに所属していた学習者である。教材の一つとして『高校生のための文章読本』（筑摩書房）を用い、授業で取り上げた文章とよく似た題材（例えば、「地図」、「写真」等）で作文を書くように指示した。
- (8) 様々な誤りが存在するが、そのまま載せる。
- (9) 添削に当たり、田中衛子氏から助言を得た。

- (10) 主題に付加された名詞修飾節が英語でも名詞修飾節で訳されている例が9例ある。ここで言いたいことは文頭、あるいは文頭に近い位置にある名詞修飾節は英語では必ずしも名詞修飾節で訳されるわけではないということである。
- (11) ベケシュ (1987) は独自の要約文の調査により、要約文における残存スコアが高いものほどより前景的、残存スコアが低いものほどより背景的と仮定し、名詞修飾節が談話の中で背景となることを示している。
- (12) 「ロングショット」, 「クローズアップ」という用語は益岡 (1991, p.160) が「物語文のテンス」を論じるにあたり用いている。

出典

- 「三越前」『黄金街道』 安野光雅著 講談社文庫 1994年
 『父親』 遠藤周作著 講談社文庫 1989年
 『深い河』 遠藤周作著 講談社文庫 1996年
 「男の八分」『恋忘れ草』 北原亜以子著 文春文庫 1995年
 「恋知らず」『恋忘れ草』 北原亜以子著 文春文庫 1995年
 「消えずの行灯」『本所深川ふしぎ草紙』 宮部みゆき著 新潮文庫 1995年
 「置いてけ堀」『本所深川ふしぎ草紙』 宮部みゆき著 新潮文庫 1995年
 「足洗い屋敷」『本所深川ふしぎ草紙』 宮部みゆき著 新潮文庫 1995年
 「あいまいな日本の私」『あいまいな日本の私』 大江健三郎著 岩波新書 1995年
 ‘Japan, the Ambiguous, and Myself’ *Japan, the Ambiguous, and Myself* 大江健三郎著 柳下国興・山内久明訳 講談社インターナショナル 1995年

参考文献

- ベケシュ, アンドレ (1987) 『テキストとシンタクス』(日本語研究叢書1) くろしお出版
 Hinds, John (1986) *Situation vs. Person Focus* くろしお出版
 本多勝一 (1982) 『日本語の作文技術』 朝日文庫
 Hopper, P. J. & Thompson, S. A. (1980) ‘Transitivity in grammar and discourse’ *Language* Vol. 56, 251-299
 金水 敏 (1994) 「連体修飾の「～タ」について」『日本語の名詞修飾表現』(田窪行則編) くろしお出版, 29-65
 リーチ, ジェフリー (Geoffrey Leech) 編著 (1996) 『ネイティブ英語運用辞典』(田中春美&樋口時弘共訳) マクミランランゲージハウス
 益岡隆志 (1991) 『モダリティの文法』 くろしお出版
 益岡隆志 (1995a) 「連体節の表現と主名詞の主題性」『日本語の主題と取り立て』(益岡隆志他編) くろしお出版
 益岡隆志 (1995b) 「時の特定, 時の設定」『複文の研究(上)』(仁田義雄編) くろしお出版
 益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法』(改訂版) くろしお出版
 McCarthy, Michael (1991) *Discourse Analysis for Language Teachers* Cambridge University Press
 マッカーシー, マイケル (1995) 『語学教師のための談話分析』(安藤貞夫・加藤克美訳) 大修館書店

表現方法としての名詞修飾節

- 南不二男・田中望（1983）「はじめに－談話の研究と教育の必要性－」『談話の研究と教育Ⅰ』 国立国語研究所, 1-5
- 水谷信子（1985）『日英比較 話しことばの文法』 くろしお出版
- 長原幸雄（1990）『関係節』（新英文法選書第8巻） 大修館書店
- 大島資生（1995）「「は」と連体修飾節構造」『日本語の主題と取り立て』（益岡隆志他編） くろしお出版, 109-38
- 大塚容子（1997）「談話における名詞修飾節小考」『聖徳学園 岐阜教育大学紀要』第33集, 167-79
- 佐久間鼎（1941）『日本語の特質』 育英書院 （復刻版 くろしお出版 1995年）